

日本性科学学会 ニュース

第39巻第4号

令和2年(2020年)12月

発行人:針間 克己 印刷所:(株)絵文社

2021年研修会・学術集会・研究会予告

第14回 日本性科学会近畿地区研修会

テーマ:新たなメディアで、みずから伝える

今回の日本性科学会近畿地区研修会は、初めてのWeb開催となります。午前中にアフリカでの経験をふまえ藤田由布先生に、「一人じゃないと伝えたい」と題して岡笑叶さんにご講演頂きます。どちらも貴重な体験をもとにしたご講演となります。

午後からは、2020年はジェンダーに関する学会や研修会の開催が困難だったことをふまえ、一步踏み込んだジェンダー医療について企画致しました。著書や文献化した臨床研究をもとに、著者自らがいつもより少し専門的な内容を日々に役立つ情報へと結びつけてお伝えする予定です。

本研修会が性に関心をもつ近畿地区的医療・福祉従事者、研究者、教員、学生などが集い学ぶ場となり、今後も性科学が発展し続けることを心から願っております。

期日:2021年2月7日(日) 10:00~17:00 (Web受付開始9:30)

会場:Web開催

連絡先:TEL 06-6346-0569 FAX 06-6346-5095 E-mail jssskinki@gmail.com

予定単位:日本性科学会10単位

参加費:【医師・その他】会員 5,000円/非会員 10,000円

【医療/心理/福祉職・研究者・教員】会員 1,000円/非会員 3,000円

【学生】 1,000円

プログラム:

10:00 開会式

座長(大阪医科大学 康純)

10:10~11:00 アフリカ貧困村の産婦人科事情～漫談風レクチャー～

大阪なんばクリニック 藤田 由布
岡 笑叶

11:00~12:00 一人じゃないと伝えたい

座長(さくま診療所 佐久間航)

13:00~16:55 ～一步踏み込んだジェンダー医療～

13:00~13:50 ガイドラインに沿ったジェンダー医療の具体的方法

～意見書フォーマットの解説・身体治療適応判定会議Web開催のこころみ～(仮)
新淡路病院 堀 貴晴

13:50~14:40 望まれる医療機関の対応と身体治療医の心構え

ナグモクリニック大阪 丹羽 幸司

15:00~15:50 ホルモン療法の効果に対する心理的評価

関西医科大学 織田 裕行

15:50~16:40 性別に違和感を持つ子どもたちがトランスするということ～医療とのかかわり～

大阪医科大学 康純

16:55~17:00 閉会式

第50回 セックス・カウンセリング研修会

期日:2021年5月30日(日)

会場:お茶の水女子大学 国際交流留学生プラザ多目的ホール+オンライン

メインテーマ:コロナ時代のセクシュアリティ

第40回 日本性科学会学術集会

2021年秋、東京都内で開催予定です。

コロナ感染状況により、1.通常開催 2.オンライン開催 3.会場+オンライン開催のいずれかの形式になります。

Vol. 39

日本性科学会

〒113-0033 東京都文京区本郷3-2-3 森島ビル4F

TEL・FAX 03-3868-3853

International Safe Abortion Day (安全な中絶の日) によせて

公益財団法人レイ・パストゥール医学研究センター

早乙女 智子

【中絶に対する温度差】

昨年、9月28日が表題の「安全な中絶の日」だと知り、急遽、京都で1回目のトークイベントを開催した。そもそも、私の関心事は今でこそ「性科学」だと言えるが、学生時代や卒後すぐの駆け出しの頃は、避妊と人口問題、それに人工妊娠中絶がテーマだった。ある日、大学同期が新聞の投稿に呼応して「中絶はいけない」と言い放ち、その頃すでに産婦人科医になろうとしていた自分は、「せざるを得ない中絶もある」と大論争となった。その後、仲の良かったその同期とは会えなくなったり今も冷静に話ができる気がしない。私のトラウマ体験である。

次にやってきたのはいよいよ産婦人科医としての研修で、中絶手術を担当することになった。それが決まったときは、やはり逃亡しようなどと逡巡したが、どうせ誰かがやるのなら、安全に安心にできるようにしよう、と腹を括った。

【避妊薬の認可】

1997年に避妊のピルの認可が近い機運が高まり、同時にピルを認可すると性感染症が増えるなどという議論が持ち上がり、そんなずれた議論の方向性にいい加減腹を立てた私たちは、「性と健康を考える女性専門家の会」を立ち上げてピル認可へ当事者として声を上げ、1999年、ピルが認可されていない最後の11か国からようやく抜け出して、日本国内で避妊用のピルが処方できるようになったのだ。それもバイアグラの認可につられるようにして。

【安全な中絶とは】

「安全な中絶」と聞くと、日本人の多くは手術の安全をイメージするのではないかだろうか。先進社会ではそんな時代はどうに終わっている。安全な中絶とは中絶ピルを飲んで行うもので、このCOVID-19時代にあっては、自宅で受け取って自己処置をするという何とも簡便なものとなっている。日本人の死生観や性についての感覚は独特で、在宅で息を引き取ることを希望していても、家族が「死にそうです」と病院に運んでしまったり、その一方で、自分とは何の関係もない赤の他人の腹の子に対して、堕ろしては可哀そうなどと言ったり、不倫をした有名人をネットで叩くなど、自他の区別がついていないよう見える。

避妊用のピルも、1955年に世界で最初の発表があってから44年の時を経て日本で正式に認可となったが、その間も治療用のピルは存在した。そして、中絶ピルが開発されたのは1980年で、フランスでの実用化が1988年、残念ながら日本ではまだ2020年の今年に治験が終わったところで、すぐには認可にはならない。すでにWHOは、安全な中絶は薬剤によるものであると結論付けていて、日本国内で議論したところで、運用上の整備の議論はいいとしても、安全な中絶の方向性としては中絶ピルをおそらく止められまい。

【9月28日のトークイベント】

今年は、昨年とは異なり、300人ほどの賛同人が集まつて、「安全な中絶の日」記念として6時間におよぶトーク

イベントが開催され、youtube配信された。法律の話、医療の話、助産師の日常、文学を見る中絶、学校教育の現場の話、そして当事者の語りなど、6時間あっても足りず、その後も毎月28日に勉強会を行うことになった。

避妊薬のピルが世に出た時、フランスの女性たちは「人生が変わった」と歓迎したという。

緊急避妊薬も同じように、妊娠不安から女性を解放するものである。そして最後の砦、妊娠検査で陽性であっても、中絶ピルが手に入れれば、自分の意思で中絶が完了する。誰に遠慮することもない、自分の身体の管理を自分で行うだけなのだ。

【墮胎罪と女性の身体権】

中絶に対する法律は国によって様々であり、微笑みの国ブータンでは中絶が禁止されているために、毎年200人の女性が、中絶しようとして命を落とすのだという。多くの国で、墮胎罪は墮胎をさせないための法律と化していて、そこに女性の身体権はない。昨年のWASで出されたセクシュアル・プレジャー宣言には詳細は書かれていらないが、妊娠・出産や流産・中絶に至るまで、身体権や快楽の視点で語ることもできるのではなかろうかと確信している。

WASでは中絶に関してあまり語られてはいないが、昨年行ったIWAC（女性の健康と安全でない中絶に関する国際会議）、FIAPAC（避妊と中絶の国際専門家会議）などの会議では、活動家の女性たちが日本ではあり得ないほど元気に、自分たちの権利を語っていた。かくいう私ですら、胎児への憐憫、などという言葉が脳裏をかすめかけたが、自分の身体に起こる不要な組織に憐憫をかけて健康を害する必要などない。憐憫というなら、精子が粗末にされないようにすればよく、そして、取れるものなら、産むつもりのない女性を妊娠させた男性が最後まで責任を取ればよいだけのことだ。

今回のイベントでは、まずは知ることからとして、中絶ピルのことを学んだ。30年も経っているので、海外では様々な知見が集積している。2016年に行ったIWACでは、まだ妊娠の何週まで可能か、という議論や、自宅で使用することと、クリニックなどで医療従事者が関わることの違いがあるか、という議論があったが、昨年2019年では、妊娠週数は28週でも可能であることや、telemedicineでいいのではないかという議論に論点が代わっていた。そして、今年2020年は、COVID-19の時代、Stay Homeで中絶も出産さえも自宅で行う時代になろうとしている。

そんな中、「緊急避妊薬を薬局で」という活動も起つたが、日本のリプロダクティブヘルス・ライツ、そしてプレジャーに対する世論の認識のズレは決定的なものとなった。今まだ、LGBTの人権は十分勘案されているとは言い難いが、もっと昔から知られていた女性の人権は置き去りだったことに、もう少し多くの当事者である女性が気付いてもいいのではないだろうか。中絶が安全になって困ることは何もない。性科学領域でも、もう少し

調査や研究が進み、これらの議論が当たり前にできることを願っている。

第49回 日本性科学会セックス・カウンセリング研修会報告

お茶の水女子大学生活科学部心理学科

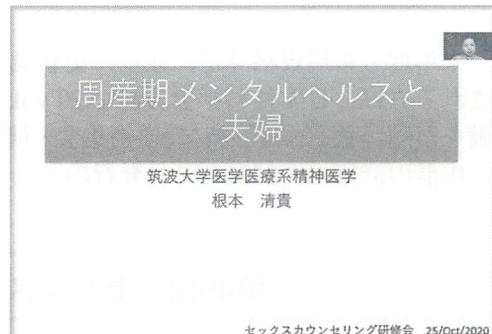
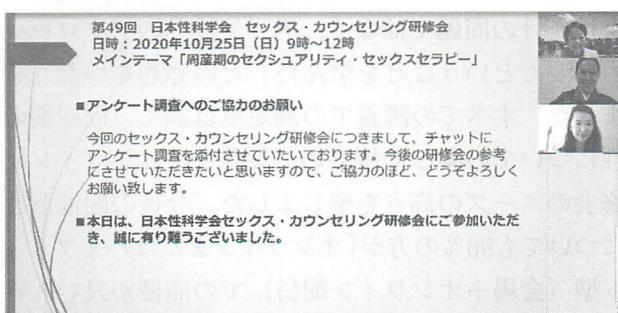
石丸 径一郎

新型コロナウイルスの感染拡大により、2020年の学会活動は大きく制限を受けた。例年5月に行っているセックス・カウンセリング研修会は中止となり、同日に開催している会員総会も書面での開催となった。また、学会設立から1年も休まずに開催し続け、第40回の記念大会となるはずだった秋の学術集会（大会長：針間克己 はりまメンタルクリニック院長）も、翌年以降への延期を余儀なくされた。しかし学会として会員の研鑽の活動を止めるわけにはいかないため、学術集会が予定されていた同日に、オンラインの研修会を実施することになった。

2020年10月25日（日）9時～12時という日程で、Zoomを使用しオンラインにて、第49回日本性科学会セックス・カウンセリング研修会として開催した。メインテーマは、本来5月に予定されていた研修会で扱う予定であった「周産期のセクシュアリティ・セックスセラピー」とした。菅沼信彦（名古屋学芸大学看護学部教授）理事と茅島江子理事（秀明大学看護学部学部長）の司会進行で、4本の講演が行われた。日本性科学会のメンバーからは田中奈美幹事（つくばセントラル病院産婦人科部長）が「授乳と性」、早乙女智子副理事長（レイ・パストゥール医学研究センター研究員）が「妊娠中・産後の性生活とパートナーシップの工夫」と題して講演を行った。また、外部の講師として根本清貴先生（筑波大学医学医療系精神医学准教授）から「周産期のメンタルヘルスと夫婦」、古川直子先生（株式会社TENGA ヘルスケア 営業企画/助産師/看護師）から「産後の性生活調査から見える夫婦の形」と題して講演をいただいた。どの先生も非常に情報量に富み、すぐに明日から役立てられそうな豊かなお話をされた。また参加者からの質問も活発で、ディスカッションも大変盛り上がった。

日本性科学会としては初めてのオンラインでのイベントとなり、どのくらいの人数に参加してもらえるのか予想がつかなかったため、参加費は安価に設定し、欲張らずに3時間の長さの企画とした。結果として全国から150名ほどの参加をいただき、参加者アンケートも概ね好評であり、大きなトラブルもなく開催することができた。

参加者のみなさま、講師の先生方に心から感謝したい。今年、大川玲子先生から理事長を引き継いだ針間克己先生と、阿部輝夫先生から副理事長を引き継いだ早乙女智子先生が、今回の研修会にて挨拶を行った。思わぬオンラインでのデビューとなつたが、今後の日本性科学会の新たな挑戦を牽引するリーダーシップを期待したい。



2020年度資格認定結果

資格認定委員会委員長 大川玲子

日本性科学会「セックス・カウンセラー」「セックス・セラピスト」資格認定規定（日本性科学会雑誌に掲載）に基づき、2020年度の新規資格認定並びに資格更新の手続きが行われました。厳正なる資格審査の結果、以下のように新規セックス・カウンセラー1名、セックス・セラピスト1名、更新セックス・セラピスト5名が認定されました。

新規認定

セックス・カウンセラー 山本 篤
セックス・セラピスト 木村 将貴

更新認定

セックス・カウンセラー なし
セックス・セラピスト 早乙女 智子 阿部 輝夫 田中奈美
福本由美子 今井伸

(登録順)

来年度も新規資格認定、並びに更新認定（2016年資格取得者が該当）の手続きが行われます。申請を希望される方は、日本性科学会雑誌2020 vol.38no.1掲載の資格認定規定並びに資格更新規定を御熟読の上、御準備をお願い致します。特に、学術集会・研修会などに御出席の際の受講証・出席証は、必ず保管してください。

申請の詳細は、2021年6月発行のニュースに掲載されます。

第49回 セックス・カウンセリング研修会アンケート結果

つくばセントラル病院産婦人科 田中奈美

初のオンライン開催となった第49回の研修会は、約150名の方（会員56%、非会員44%）に参加いただきました。103名の方から受講後のアンケートにもご回答いただきました。職種は、助産師36%、医師33%、心理職7%、学生（看護、助産）7%、看護師5%、教員4%などでした。参加のきっかけは「学会HP」「SNSや各種ML」が53.3%、「学会ニュース」「知り合いから聞いて」が46.7%でした。

筑波大学精神科准教授の根本清貴先生の「周産期メンタルヘルスと夫婦」には、「子どもが生まれた後のパートナーシップのバランスがとても重要と再確認。ぜひ出産前教育に組み込んで欲しい。それによってセックスレス化が予防できると思う」、「どうして産後うつになるメカニズムになるのかという逆の発想に、究明の姿勢に感銘を受けました」などの感想をいただきました。私の「授乳と性」に対しては「授乳と性の関係の話を聴いたのは初めてだったのでとても面白かった」、「プロラクチンやオキシトシンの性機能との関係についてまとまたお話を聴けてとても勉強になった」などの感想がありました。早乙女智子先生の「妊娠中・産後の性生活とパートナーシップの工夫」には、「セクシュアル・プレジャーの考え方、自分らしいセックスなど考えさせられる

ことが多かった」、「女性の体のことを知りつつも、『こうである』という決めつけはしてはいけないという心構えも大変勉強になった」などの感想をいただきました。また、早乙女先生と共同で行っている周産期の性機能調査については、「調査の今後の結果が楽しみ」との声を多数いただき、このような研究が必要とされていることを実感いたしました。株式会社TENGAヘルスケア 営業企画、助産師、看護師の古川直子さんの「産後の性生活調査から見える夫婦の形」には、「男性側の意見が反映されている点が、他の講演にはなくて、大変参考になった」、「妊娠は女性だけの問題ではなく、男・父性へのアプローチも必要だということを学んだ」との感想をいただきました。すべての講義での満足度は高く、周産期の性についての学びの機会の必要性と、オンライン研修会のニーズの高さを感じました。今後の開催形態についても96%の方が「オンラインまたはハイブリッド型（会場+オンライン配信）での開催が良い」と回答されました。今回のオンライン開催の成功をきっかけに、今後も新しい学びの形を学会としても模索したいと思います。最後に運営面で多大なる労をお取りいただいた石丸先生にこの場を借りて御礼申し上げます。